



社会で生きて働く力を育む学級活動の指導のあり方

著者	前田 康一
雑誌名	紀要
号	20(別冊)
ページ	82-95
発行年	2018-03-20
URL	http://doi.org/10.32125/00000010

社会で生きて働く力を育む学級活動の指導のあり方

前田 康一

キーワード：特別活動の指導法、総合的な学習の時間の指導法、キャリア教育

1. 基本的な考え方

現代の子どもたちが生きる2030年代は、生産年齢の減少、少子高齢化の進行、人工知能の飛躍的な進化、グローバル化の進展と絶え間ない技術革新等により、社会構造の予測困難な時代になってくる。このような時代にあって、学校教育において求められる力の一つに、子どもたちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決できる力を身に付けさせることがある。その力を身に付けさせるためには、全教科等において教育活動を工夫することが喫緊の課題であろう。

今回の学習指導要領において、学級活動の目標が次のように示されている。

学級や学校での生活をよりよくするための課題を見いだし、解決するために話し合い、合意形成し、役割を分担して協力して実践したり、学級での話し合いを生かして自己の課題の解決及び将来の生き方を描くために意思決定して実践したりすることに、自主的、実践的に取り組むことを通して、第1の目標に掲げる資質・能力を育成することを目指す。

これは、特別活動の目標に掲げる資質能力の育成に繋げることをねらいとしているものであり、これからの社会を生きる上で身に付けさせたい資質能力を示すものでもある。

そして、特別活動の目標に掲げている資質能力（知識・技能、思考力・判断力・表現力等、学びに向かう力・人間性等）を、学級活動において育成すべき資質能力として次のように明示している。

- 学級における集団活動に進んで参画することや意識的に健康で安全な生活を送ろうとすることの意義について理解するとともに、そのために必要となることを理解し身に付けるようにする。（知識・技能）
- 学級や自己の生活、人間関係をよりよくするための課題を見いだし、解決するために話し合い、合意形成を図ったり、意思決定したりすることができるようにする。（思考力・判断力・表現力等）
- 学級における集団活動を通して身に付けたことを生かして、人間関係をよりよく形成し、他者と協働して集団や自己の課題を解決するとともに、将来の生き方を描き、その実現に向けて、日常生活の向上を図ろうとする態度を養う。（学びに向かう力・人間性等）

さらに、これらのねらいを達成するための学習過程として次の3つの観点が示されている。

【学習過程】

- （1）学級や学校での生活をよりよくしていくための生活上の諸問題から、学級全体で解決すべき課題を見いだし提案すること。
- （2）学級会の場において、その課題の解決に向けて提案の趣旨を踏まえた上で、話し合い、一人一人の意見を尊重しながら、意見を整理・分類したり、比べ合ったりすることで折り合いを付け学級としての考えをまとめ、合意形成を図っていくこと。

(3) 合意形成し決定したことについては、学級全員で役割や仕事の分担をし、協力して取り組むこと。

本研究においては、研究のテーマである「社会で生きて働く力を育む学級活動の指導のあり方」に迫るために、学級活動の内容の中でも(1)の「学級や学校における生活づくりへの参画」に焦点を当て、学級活動で育成する資質能力を身に付けさせるため、先の学習過程に即して研究を進めることにする。そして、学級活動を進める時には、学級や学校における生活をよりよくするための課題を見出し、子どもたちが主体となって解決方法を話し合い、合意形成を図り、決まったことに対して協力して実践したり、意志決定したことを努力して実践したりするための指導の在り方を研究していくことにする。

2. 学級活動の集団活動を考える

学級活動の集団活動を考える時に重視したいことは、子どもたちの実態を分析し、学級集団内の好ましい人間関係を育て、よりよい生活を築いていくための重点指導事項を設定することである。そして、教師は、子どもたちが主体的に取り組む集団活動を意図的に仕組むようにする。その活動を実践していく中で、集団と個が関わり合い様々な問題が出てくることが予想される。

その時、その問題を解決していくために必要な意見の違いや多様性を踏まえつつ、合意するための建設的な思考力や多様な他者を受け入れたり尊重したりするなどの人権感覚的な思考力等を身に付けられるよう、学級活動や個別指導を通して指導するようにする。そして、そこで学んだことを生かし、学級活動の時間や休み時間等を使って活動に取り組むようにする。

このような集団活動を中心に置いた意図は、子どもたちが多様な他者と協働する意義や活動の仕方を説話的に話しても真に身に付くことにはならない。子どもたちが、主体的に取り組む活動の中で出てくる問題に対して何とか解決しなければと真実感を持って受け止めるとともに、学級活動等で解決方法を導き出し実践に取り組むことができたとき身に付くものであると考えるからである。

このようにして、自分たちで話し合い問題を解決して活動をやり遂げた時には、達成感を味わわせることができる。そうした感動を伴う知識・技能や思考力・判断力・表現力等の資質能力は、生きて働くものとして身に付くものである。さらに、こうした一連の活動体験を積み重ねることによって、自分たちの身の回りにある問題に気づく目と、よりよい生活に高めていこうとする意欲態度を育てることに繋がっていくと考える。

3. 学級活動を計画する時の留意点

話し合いの進め方やよりよい合意形成、意思決定をするための方法等の知識技能が子どもたちに真に身に付くか否かは、活動に対してどのように関わっていくかにかかっている。子どもたちが主体的に取り組む集団活動を仕組み、喜びや楽しみを味わいながら自己の高まりを自覚させることが必要である。望ましい集団活動の創出こそが、子どもを育てることに繋がると考える。

そのために、次の7つの留意事項を考えている。

- (1) 明確な目標を立て、クラスみんなに共通理解させること。
- (2) クラス一人一人の役割を明確にし、子どもたちの思いや考えが発揮できるようにすること。
- (3) 苦労があり簡単にはやり遂げられない活動であること。

- (4) 活動をしていく中で、まわりの人の気持ちを意識できるものを仕組むこと。
- (5) 活動をしていく価値を明確にし、子どもたちに理解させること。
- (6) 実践した結果がはっきりと理解できるような活動を仕組むこと。
- (7) 子どもたちが興味関心を持てる活動を仕組むこと。

4. 学級活動（話し合い活動）の実践上の留意事項

- (1) 活動計画を立てるときは、活動に対する評価規準を明確にし、実践する中で規準に即して評価し、問題点が出てきたときには随時指導する。
- (2) 活動を実践していく中で出てくると予想される問題の解決に結びつくように、学級活動の指導内容を決定する。
- (3) 活動と結びつけながら指導展開を工夫する。
- (4) 具体的な活動例をあげる等の指導展開を工夫する。
- (5) 学級活動で指導した後は、見通しが立てられ実践化につながるように指導展開を工夫する。
- (6) 活動の中で起こってくる問題を、子どもたちが自主的に取り上げ解決策を話し合い、実践活動に移していけるように支援する。
- (7) 子どもたちの自主的、自治的な姿を認め励まし意欲を喚起させるようにする。

5. 子どもたち一人一人と関わる上での留意事項

活動を進めていく上で問題行動を示す子どもたちには、集団との関係で自己のあり方を自覚させるような指導を心がけるようにする。その際の留意事項としては、次のようなことを考えていくようにする。

- (1) 子どもたちの立場から考え、共感的な態度で接するようにする。
- (2) 子どもたちに問題を捉えさせ、共に考え解決への行動の仕方を考えさせるようにする。
- (3) 子どもたちが言うことに心から耳を傾けるようにする。
- (4) 子どもたちの願いや思いを受け入れるようにする。
- (5) 子どもたちが活動をやり遂げられるように励ましの言葉かけを大切にする。

6. 実践事例

(1) 学級の実態

【5年生の4、5月頃の実態】

- 「先生、A君が便所に入って鍵をかけ出てこない」と言いにくる。まわりの子は、「A君は4年生の時もああやったで、ほっておいたらそのうち出てきやはるで」と知らん顔。A君は4年生の時、授業中机の下に潜り込んでしまい、先生を手こずらせたことが何度かあった。
- 自分は「〇〇だ。」と自己主張ははっきりするが、自分中心の考えが強く、人の考えを受け入れることができない。人とけんかをする事が多く、すぐに手が出てしまい自分の気持ちを整理して相手に伝えることができない子が多かった。
- きまりや約束事が守れず、注意を受けると言い訳をすることで正当化しようとするところがあ

り、自分で責任をとれない言動が多く見受けられた。

(2) 指導の重点事項を設定する

先の実態を分析して、次のような点を一人一人に身に付けさせることに重点を置き、集団活動を通して指導していくようにした。

- 合意形成をするための話し合いの手順や方法を学ばせる。
- 集団の目標を達成するための役割の遂行や協力の必要性に気付かせる。
- 集団で活動することの楽しさを実感させる。
- 集団と個の関係のよりよい在り方を学ばせる。

(3) 活動仮説

子どもたちの実態を考慮し、社会で生きて働く力を育むために次のような活動考えた。

子どもたちの毎日の生活の中に、クラスみんなで目標を立て、その達成に向けて起こる様々な問題を話し合い協力して解決し、達成感が持てる活動を創出し実践すれば、社会で生きて働く力を育むことができるであろう。

この集団活動を、学級活動や放課後、休み時間等を使い実践していくことにする。

(4) 予想される問題

子どもたちの実態から考え、活動を進めていく中で、次のような個と集団に関わる問題が出てくることが予想される。

- 集団の中では一人一人が責任を持って仕事をしていかなければならない。
- 集団の中では自分勝手な行動は、集団の目標達成の妨害になる。
- 集団の中ではまわりの人に対する思いやりの気持ちが大切である。
- 集団の中で合意形成を図る上で話し合いのルールが必要である。

こうした課題を、学級活動（話し合い活動）等において子どもたちが主体的に話し合い解決方法を出し、実践していくようにする。

(5) 活動事例Ⅰ

—長縄連続跳びの記録に挑戦しよう—

①活動のねらい

一見簡単そうに見える活動であるが、その中には多くの価値が含まれている。連続に跳ぶということは、長縄を跳ぶ時に一人も間を空けてはいけないということである。そのため、回す人も跳ぶ人も一体となってクラスのリズムを創りあげていかなければ記録を伸ばすことはできない。このクラスのリズムを創り出していく過程において、集団と個に関わる課題が出てくることが予想される。長縄にひっかからないようにするためには、一人だけ跳べたとしても、次の子の長縄を跳ぶリズムが崩れ、ひっかかってしまうことがある。一人一人が、クラスのリズムを意識しながら責任を持ってしっかりと跳ばなければならない。クラス30人いれば、30通りの跳び方をする。その跳び方を認めながら、クラスとしてのリズムをつくりあげていかなければならない。そこには一人一人を思いやる気持ちが必要であり、その気持ちがあつてこそ跳び続けることが可能になる。そして、長縄跳びに取り組む中で出てくる様々な課題をクラスのみんなで話し合い、解決方法を考え目標の記録を達成した時には、大きな喜びを味わうことができる。

この達成感は、クラスにおける一人一人の存在感や所属感を高め、クラスの連帯感をより強

固なものにしていくことに繋がるものである。また、その過程で学んだ合意形成をするための話し合いの手順や方法等の知識技能は、生きて働くものとして身に付けることができると考える。

②評価規準

- みんなで「やってみよう」という意欲が持てる。
- 周りの人の行動に気付くことができる。
- 一人一人が相手の立場に立って考えられる。
- 一人一人が責任を持って活動することが、クラスみんなのためになることに気付ける。
- みんなで活動することのよさに気付ける。

③集団活動を進めていく中での子どもたちの問題点と指導

集団活動に取り組むにあたり、最初に活動計画を立てさせた。その内容は、「長縄の記録の目標をどれだけにするか」、「活動する時間をいつにするか」であった。その時の子どもたちの反応は、「長縄なんか簡単やんか」と意欲的で、5000回を目標とすることが決まった。また、活動する時間は毎日中休みとすることになった。活動が始まると、記録は全く伸びず20回ぐらいでひっかかってしまう日が続いた。ひっかかるたびに子どもたちからは、「ああ、ひっかかった」「どじやな」と揶揄する声が続いた。

そこで、「相手に対する思いやりの気持ちと一人一人が真剣に跳ぶことが大事である」ことを、学級活動の時間に指導することにした。

【学級活動の展開】

児 童 の 活 動	児童の反応と教師の指導・支援
<p>1 過去に担任した子どもたちの長縄跳びの取組みの姿をビデオで視聴する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・跳んでいる人を見る目 ・回す人の態度 ・跳んでいる人の態度 <p>2. 自分たちの取組み方を振り返り考える。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・3つの観点から視聴させ、自分達との違いに気付かせ問題意識を持たせるようにする。 ・子どもたちは真剣に視聴していた。 ・簡単に跳べると思っていたのに、なぜ跳べないのかという問題意識を強く持った。 ・ビデオを見ることで、自分たちとの違いに気付いた。 ・自分達も跳んでみたいという意欲を喚起するよう配慮する。 ・跳んでいる人を見ないで、自分の番以外は遊んでいた。 ・跳ぶときにふざけていた。 ・とにかく回したらいいと思い、跳んでいる人のことは考えていなかった。 ・簡単だと思って真剣にやっていたいなかった。 ・人の事なんて一つも考えていなかった。 ・3つの観点から具体的にどのように活動す

3. これからどのように活動していけばよいかを考える。	<p>るのかイメージが持て実践化に結びつくように配慮する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ふざけないで一生懸命跳ぶようにする。 ・もっとみんなのことを考えて跳ぶようにする。 ・回す人は、跳ぶ人のことを考え回すようにする。 ・子どもたちが目標達成に向け、長縄跳びを続ける意欲が持てるよう配慮する。
-----------------------------	--

学級活動で指導した後、一人一人が真剣に長縄連続跳びに取り組むようになった。それにつれて記録も100回、200回と伸びていった。子どもたちは記録が伸びることに喜びを感じ、意欲的に取り組んでいった。しかし、ひっかかったりする子に対しては、相変わらず「あ〜」「なんでひっかかるんや」といった言葉を浴びせることがあった。言われた子たちは、長縄跳びが嫌になり、中休みに集まらなくなっていく。一方、集まって来る子たちは、記録を伸ばそうと必死であった。その状況が続く中で、集まってこない子たちへの不満がつのっていった。

そこで、教師から熱心に取り組んでいる子へ「このことをみんなで話し合ってはどうか」と投げかけた。その子たちが中心となり、学級会が開かれるようになった。

【学級会の展開】

話合いの順序	指導上の留意点
1. はじめの言葉	<ul style="list-style-type: none"> ・みんなで長縄跳びを続けていきたいという願いを話させるようにする。 ・跳べない子の気持ちを思いやる話し合いとなるよう支援する。 ・自分だけのことを考え跳ぶのではなく、まわりの人のことを考えた跳び方をする必要があることに気付かせるような話し合いとなるように配慮する。 ・長縄の回し方、長縄の跳び方、長縄への参加の仕方の観点からルールを決めるようにする。 ・活動への意欲を喚起するような話をする。
2. 提案の理由	
3. 話合い	
（1） どうして中休みに集まらないのか理由を出し合う。	
（2） 長縄跳びのクラスの約束をつくる。	
4. 決まったことの確認	
5. 話合いの振り返り	
6. 先生の話	
7. 終わりの言葉	

話合いは、何とか現状を打開する方法を考えようと真剣そのものであった。中休み時間に集まらない子たちも、最初は『用事があるから』といった理由を述べていた。「みんなで決めたことなのに来なければいけない」といった厳しい発言が相次ぐうちに、本音の発言が出てきた。「ひっかかった時に、「あ〜」とか「なんでひっかかるん」と言われるのがいやだ」「言われたらどんな気持ちになると思う」「一生懸命跳んでないからひっかかるんや」「ひっかかろうとし

て跳んでいるわけではない」と激しい言い合いになっていった。

この状態がしばらく続いたところで、教師から「一人一人は一生懸命跳んでいると言うけれど、自分の後に跳ぶ人のことを考えて跳んでいるだろうか。クラスとしてまとまって跳べているだろうか。」といった話をした。すると「クラスで長縄の約束を決めたらどうだろう」という提案が出された。そこで、みんなで話し合い次のような約束が決められた。

○長縄の回し方考える。

- ・跳んでいる人を見て回す。
- ・跳んでいる人に合わせる。
- ・疲れたら交代してもらう。
- ・手拍子に合わせて回す。

○長縄の跳び方を考える。

- ・前の人との間を空けない。
- ・見ている人は手拍子をする。
- ・手拍子に合わせて跳ぶ。
- ・遅れる人がいたら後ろから押してあげる。
- ・長縄の真ん中で跳ぶ。
- ・ひっかかった人がいてもけなしたりしない。

○長縄跳びへの参加の仕方を考える。

- ・休み時間がきたらすぐに運動場に集まるようにする。
- ・勉強で遅れる場合はしかたがない。
- ・全員がそろっていない時は記録が伸びても記録達成とはしない。

学級会で決まったことを「長縄憲法」として教室に掲示することになった。それを基に、長縄跳びの活動は続き記録も伸び、1000回を超えるようになっていった。しかし、「長縄跳びやめよう。他のことをしよう。」といった発言をする子も出てくるようになってきた。

そこで、「目標を達成するためには、みんなの力を合わせねばり強く取組んでいくことが必要である」ことについて、学級活動で指導することにした。

【学級活動の展開】

児 童 の 活 動	児童の反応と教師の指導・支援
1. 過去の子どもたちの長縄跳びの取り組みの話を聞く。	<ul style="list-style-type: none">・自分たちの先輩の取り組みであり身近な話として真剣に聞くことができた。・過去に長縄跳びに挑戦した子どもたちの長縄跳びの記録の変化を掲示し、記録が伸びない時にどのようなことをして克服したかを話すようにする。・記録は簡単に達成することはできず、みんなで話し合い協力して困難を乗り越えたことを中心に話をする。
2. これからの長縄跳びの取り組みを考える。	<ul style="list-style-type: none">・記録達成に向けがんばろうとする意欲が高まるように配慮する。・長縄跳び憲法を守って取組んでいくことを確認した。・記録が達成した時の喜びは大きかった事も伝え、活動への意欲を喚起するようにする。

教師からの話を聞いた後の子どもたちの取り組みは真剣そのものであった。雨の日は体育館で

取組み、体育館が使えない時は、雨のあたらない軒下を使い取組んでいった。そして、ある雨の日、体育館で取組んでいった時、2824回という記録を達成することができた。その時は、長縄が切れてしまい記録が止まってしまった。子どもたちは長縄が切れたことを残念がったが、記録が2000回を超えたことには大変喜んだ。

④B君への個別の関わり

B君は、家庭での愛情に満たされていない子どもであった。特に、母親の愛情が不足していた。しかし、とても几帳面で身の回りの整理整頓はきちんとできていた。

年度当初から、B君とはよく話をするよう心がけていた。B君は、問題行動を起こすことも多く表面的には凄く悪い子に見えた。しかし、話をするうちに、まわりの人が自分を認めてくれない一方的に悪いと決めつけた接し方をするに不満を持っていることが分かった。B君は、自分を認めてほしいという欲求が強いことにも気付いた。自分を受け止めてくれる教師には、心を開き正直に話をするようになっていった。

長縄連続跳びに取組んだ時、B君は最初の頃はよくふざけていた。その時、周りの子たちはB君が怖いからか何も言わなかった。教師もその場では注意をせず、個別に呼び出し話をした。

T：どうしてひっかかったと思う。

B：変わった跳び方をしようと思って跳んでいたらひっかかってしまった。

T：なるほど。ひっかかった時どう思った。

B：別に何も思わない。

T：クラスみんなはどう思っていたと思う。

B：ふざけて跳んでいたのは僕だけと違う。

T：そうやなあ。でも一生懸命跳んでいる人もいたやろ。その子たちはどんな気持ちやと思う。

B：う～

T：先生はとっても嫌な気持ちやと思う。せっかく目標が達成できるところだったのにと思っているんとかうかな。

周りの子がどう思っていたかを考えさせようと働きかけをしていった。長縄跳びの目標100回が達成でき、200回の目標に挑戦している時である。ふざけて跳んでいたB君が、もう少しで200回となる時にひっかかってしまったのである。まわりの子は、B君を責めることなくがっかりとした表情を示すだけであった。B君はこの時はしょんぼりとしていた。教師はB君を呼び二人だけで話をした。

T：B君悪いことしたと思っているんやろ。

B：うん。

T：明日からどんなふうにやってくれるか楽しみにしているわ。がんばってなあ。

⑤活動後の子どもたちの感想

【個別の関わりをしたB君の感想】

—前略— ぼくは、長縄を始めた時はよくふざけていた。でも、ある日いつものようにふざけて跳んでいたらひっかかってしまった。その時は、目標の200回にもう少しで達成できるところだった。みんなは何にも言わなかったけれど、とてもがっかりした顔をしていた。その時、

ぼくはふざけたりしてみんなの気持ちをめちゃくちゃにしているんだなあと気付いた。—後略—

【活動後の児童の感想】

今日の中休み、なんと2824回跳べました。これだけ跳ぶにはとても時間がかかりました。とても苦勞しました。長縄を回す人も、とてもえらそうで途中で違う人と交代しました。跳んでいる人も、ずっと手を叩いていたので真っ赤になってしまうほどでした。途中、クラスのリズムが崩れかかることが何度もありました。その時、「みんなに合わせて」という声が何度も出ました。そして、もとのリズムに戻すことができました。

跳び終わった時は、「やった」という気持ちでした。クラスが一つにまとまっていると感じました。こんなふうに跳べたのも、みんなでいろいろと話し合い、考えて憲法をつくったりして、みんながふざけないで一生懸命跳んだからだと思います。それと、あの時あきらめないで続けてやったから、こんな記録が達成できたと思います。本当によかったなあと思います。とてもうれしいです。

⑥活動の考察

子どもたちはこの活動に取り組んでいく中で、クラスみんなで取り組んでいくことのよさに気付いたようである。また、様々な問題を自分たちで話し合い考え、よりよい解決方法を見つけ出し、実践していく力が身に付いていったようである。この活動は5年生の当初の取り組みであり、ここで培った力が、それ以後の様々な活動において生かされていった。

また、みんなと活動する時には自分勝手なことが許されず、まわりの人の気持ちを考え行動することの大切さにも気付いていった。この活動に取り組み始めた頃から、生活の場面でも自分のことだけでなく、まわりの人のことを考えた行動が少しずつ見られるようになっていった。

さらに、まだまだ一部の子ではあったが、自主的に学級会を開き自分たちの問題をみんなで解決していこうとする姿勢も見られるようになっていった。特に、話し合いによってクラスの問題を解決する意義や方法を学んでいった。この学びが次の活動に生きて働き、他の子どもたちにも広まっていった。

(6) 活動事例Ⅱ

—みんなの心をひとつにして歌おう—

①活動のねらい

合唱というのは、一人一人が精一杯力を出し切り、みんなで力を合わせながら歌うことによって素晴らしいハーモニーが作り出される。いい歌声をつくり出すためには、一人一人が自分に任された曲のパートを精一杯練習し歌わなければいけない。一人一人が練習すればするほどいい歌声をつくりだすことができる。その上で、一人一人がみんなを意識し、合わせながら歌いきるところにさらにいい歌声が作り出せるのである。その状態は、クラスの子どもたちの心が、歌を歌うことで一つになっているのである。

このようにいい歌声を作り出す過程において、子どもたちはまわりの人に対する思いやりの心に気付くであろう。また、みんなとともに活動する時には、自分勝手な行動が許されず、自分に任された役目に責任を持つてすることが必要であることにも気付くであろうと考えた。

こうして、みんなでよりよい歌を歌いきった時には、みんなで活動することの喜びを味わう

ことができるであろう。さらに、この気持ちはクラスの連帯感の醸成につながっていくものであろうと考えた。

②評価規準

- ・ 任された役目が責任を持ってできる。
- ・ 友達を思いやる心が大切であることに気付ける。
- ・ 自分達で進んで活動できる。
- ・ 目標を達成するために粘り強く取り組める。
- ・ まわりの人のことを考えながら活動できる。

③活動を進めていく中での子どもの問題点とその指導

「長縄跳びに取組んだように、みんなでやりとげたという喜びが感じられるものを卒業までにつくりだそう。みんなは、5年生から歌を歌うことをがんばってきたので、その集大成ということで、みんなの心をひとつにしていい歌声をつくり出しませんか。そして、11月24日の『毎日子ども音楽コンクール』に学級として出場してみませんか。」と投げかけた。子どもたちからは、すぐにやってみたいという反応が返ってきた。技術的なことは、音楽専科の教員に協力してもらい取組み始めた。

取組み始めて数日がたったころ、「私はコンクールに出られません。その日そろばんの試験があるから。」「その日サッカーの試合があるから出られません。」「私、バレーの発表会があるから出られません。」という子が出てきた。その子たちに対して「せっかくみんなで決めたことなのに、そんなこと止めたらいいいやんか。」「バレーぐらいどうでもいいやんか。みんなのほうが大事やんか。」という声が出てきた。

そこで、「お互いの立場を理解して相手を思いやり、合意形成ができる」ことを目指し学級活動で指導することにした。指導の前に、子どもたち全員に「MBSコンクールの当日に参加できない子がいることをどう思うか」というテーマで自分の考えを書かせた。そして、次の4つを資料として配布し学級活動の指導をした。

みんなに出てもらいたいです。私は少しさびしいけれど、私の分までがんばってほしいです。それまで、私は練習などでみんなに協力していきます。(バレーの発表会に参加するといっていた子の意見)

私もMBSコンクールに出たいです。でも、出るんだったらみんなで出て歌いたいから、一人でも抜けてしまうということはだめだと思います。Aさんのバレーの発表会も自分が今まで一生懸命練習してきた成果を発表するのだから大事だと思います。だから、コンクールに出る時間と発表会の時間がずれるようなら出たらいいい。時間がずれなければ、みんなで話合いたい。

私は、MBSコンクールに出たいです。もう卒業してしまうので、6年生最後の思い出として出たいです。でも、4人も出られません。でも、私は何とかしてMBSコンクールに出たいです。

ぼくは、Aさんが出るべきか、出ないでもよいのか、迷っています。一人でもいなくて歌っ

て、たとえきれいな声で歌ったとしても、クラス全員でやっていないので意味がないと思います。できるなら、なんとかして出てもらいたいです。みんなで歌いたいです。

【その時の授業記録の一部】

T：みんなは、この4人の意見をどう思いますか。

C：Aさんたちが出られなかったら、みんなの心を一つにして歌うことにはならないと思う。でも、出たいので悩んでいます。

C：私も、Aさんは今までバレーの練習をしてきたんだから、それを発表したいと思っています。と思うので、出られないのは仕方がない。

C：ぼくは、せっかく歌を練習してきたのだから毎日コンクールに出たい。

C：私も、小学校生活も後ちょっとになったし、クラスみんなでやったなあといえるものをもっと作りたい。そろばんでいけない人は、何とか違う日に受けたらどうですか。

C：そろばんの試験を受ける人は、前から一生懸命練習してきたんだからかわいそうです。

C：それもわかるけどコンクールに出たい。

〈この後、出場したいが、そろばんの試験も受けない人やバレーの発表会に出たい人の気持ちも分かるということで、どうしたらいいんだとクラス全体が困ってしまい話合いが進まなくなってしまった。〉

T：みんなは出場したい気持ちが強いんだけど、みんなが出られなければ意味がないという意見なんだね。それに、出られない人の気持ちもよく分かるということだね。じゃあO君が言ったように、日が替えられないか、出場の時間をずらすことができないか調整してみてもどうでしょう。出場したい人も、出場できないという人も、相手の気持ちをよく考えて発言できたと思います。こんな気持ちで歌が歌えたら素晴らしいと思います。

話合いをした数日後、そろばんの試験に行くといっていた子が、日記の中でコンクールへの出場のことについて次のように書いていた。

みんなが、私のことを責めなかったことがとても嬉しかったです。あれから考えてみて、小学校最後の思い出にするためにそろばんの試験をやめて、コンクールに出ることにしました。そのことをお母さんにいうと、「だめ、あんたは何回も落ちているんやで」といいます。私は決めているのですが、お母さんがいいといってくれません。先生どうしたらいいですか。

そこで、母親に連絡し学級の取組みの様子等を伝え、何とか出場させてくださるようお願いした。最初はそろばんの試験に参加させると言われたが、他の子どもたちの思いを話す中で理解をしていただくことができた。

サッカーの子は、日が替わり出場できるようになった。バレーに出場する子は、すでに役も決まり発表会にはどうしても出場しなければならなかった。しかし、その子は、「練習ではみんなと協力してがんばるのでみんなには出場してもらいたい」という気持ちを強く持ち、そのことをみんなにも訴えた。みんなもその気持ちを尊重し出場することに決めた。

そうして、歌の練習がまた始まりだした。朝の自習の時間を使いパート別の練習をしようと言い出す子が出てきた。その子たちが中心となり学級会が開かれ、朝の会で練習することが決まった。こうして、子どもたちの学校生活に歌うことが位置づけられていった。しかし、多くの子はこのように真剣であったが、一部の子たちはただつられてやっているだけという状態で

あった。

そこで、「一人ひとりが、責任をもってがんばりぬくことによってクラスとしてよりよいものがつくり出せる」ことに気付かせるため、学級活動で指導することにした。

【学級活動の展開】

児童の活動	児童の反応と教師の指導・支援
1. 5年生のとき、長縄跳びで2824回の記録を達成した原因を振り返る。	・みんなの心が一つになっていた。 ・クラスがまとまっていた。 ・一人ひとりが一生懸命跳んだ。 ・跳んでいる人をみんなが見ていた。
2. 前の時のクラス状態と今回を比べて違うところを考える。	・今は、一人ひとりが一生懸命になれていない。 ・ふざけている人がいても注意しない。 ・パート別の練習をしている時、他の人を気にしないでしゃべっている。

【教師の話】

みんなは、合唱の練習で一人一人がんばっていますか。朝の会や音楽の時間の練習で、「自分一人ぐらいがんばらなくても」という気持ちはありませんか。みんな一人一人がもっとがんばらないといい歌声はつくりだせません。一人ひとりが、この曲をどのように歌うのかを真剣に考えないとクラスとしていい歌声になりません。

長縄の時も、一人一人がみんなのことを考えしっかりと跳んだから記録が伸びたんですね。

この指導後、子どもたちは家庭での自主勉強で歌の曲想を考えてくる子、鏡を使い自分が歌っている時の表情を研究してくる子、自分に任されたパートを何度も練習してくる子、発音の練習をして言葉をはっきりと言えるように練習する子等、自分の課題の解消に向け努力する姿が見られるようになった。そうした姿を、朝の会や帰りの会で紹介し賞賛していった。それにつれ、そうした姿はどんどんクラスの中に広がっていった。

活動を進めていく中で、子どもたちの歌声をテープに何度かとっていった。そうして、自分達の歌声を自己評価させ、自分達でよりよい歌声をつくりだそうとする意欲を喚起させようとした。

【練習の時の子どもの感想】

音楽の時間に歌って録音をしました。テープを聞いていると、ハーモニーのあっていないところがありますが、気にかかるのは出だしのところです。すぐに音が出ないところです。私は、みんながやる気と勇気を持っていないんだと思います。一人が「よし歌うぞ」と思っている、みんながそう思わなければ歌声はそろいません。一中略— それから朝の自習時間の時の歌い方だと、強弱や歌い方を学習したことがしっかりとできていません。そのへんを話合うとか注意し合うなどしてがんばりたいです。後1週間でコンクールです。みんなと力を合わせてがんばりたいです。

【その時の子どもの感想】

草津市民会館で開かれた、MBSコンクールで今までがんばってきた成果を出しきろうとがんばりました。その結果、「優秀賞」という立派な賞をもらいました。低音、中音、高音のバランスがよくとれていてとてもよかったです。一人一人が一生懸命歌えました。今までの私達は、何をやってもいいかげんでした。けれど、みんな一人一人が一生懸命歌えて大きく成長できたと思います。

最近のみんなの授業の様子もだれもが発表し、「勉強がんばるぞ」という姿が見られて素晴らしいと思います。みんなのやる気が見られています。今までは、自分で何もやろうとしなかったけれどやる気を出してきました。音楽会までの朝の会や帰りの会の時間にがんばって歌の練習に取り組んできました。このがんばりの様子を文集にすることが、学級会で決まりました。みんなでやればできることが分かったんです。いつも途中であきらめてしまうけれど、コンクールに出るために一生懸命最後までがんばりました。本当にがんばってきてよかった。このコンクールに出場したことがきっかけとなり、みんなの心がひとつになれたことは最高の喜びです。

また、がんばるという心は、これからの人生を生きていく時にいろんな面で役立つと思います。これからもこの気持ちを忘れず、人生を生きぬきます。

こんな練習を続けながら、MBSコンクールでその成果を発表した。当日バレーの発表会に出場すると言っていた子も、家庭の協力があり時間の都合をつけ参加することができた。発表会では子どもたちは緊張していたが、練習したことを精一杯出し切り歌うことができた。その結果、優秀賞に輝いた。

④活動後の考察

子どもたちはこの活動に打ち込み、2年間（5・6年生）の中で一番の思い出に残るものをつくり出した。みんなでやりとげた喜びは、クラスの連帯感を高めるとともに、学校生活すべてに主体的に取り組む意欲に結びついていった。さらに、お互いを認め合う望ましい学級集団が醸成されていった。

子どもたちの作文にもあるように、一人一人が頑張り抜くことが、クラスとして素晴らしい物を作り出すことができることを学んでくれたようである。また、活動当初4名の子が「出場できない」と訴えた時、その問題をみんなで解決していく過程で、相手の立場に立って考え、折り合いを付けて合意形成を図り実践していくことの大切さを学んだ。

こうした学びができたのは、集団活動に対して主体的に取り組み、そこから出てくる問題を、真剣に話し合い解決方法を考え、実践しやり遂げることができたからである。また、この真剣さが、子どもたちの内面を揺さぶり大きな感動をもたらしたと考える。

7. 考察

集団活動に取り組む中で起こってくる問題を、学級活動の中で指導して解決方法を考えさせ実践に繋げていった。こうした事例は、先に挙げた2事例以外にも年間を通していくつか実践していった。その結果、6年生の3学期になると、子どもたちは自ら学級の生活上の問題に気づき、それを学級会等で取り上げ、今までの体験を通して学んだ話し合いの仕方や手順を活用して

解決していこうとする姿見られるようになった。

また、その話し合いも、相手の立場を尊重してよりよい生活を築いていくためにどのようにしていくべきかを考え、合意形成を図り、実践していくことができるようになっていった。こうした体験の積み重ねにより、学級のよりよい人間関係を形成することができるようになっていった。さらに、様々な意見を基に適切に判断し、他者との関わりを考えながら意志決定していく態度能力も育むことができた。

付記

キャリア教育は、社会的な自立、職業的な自立に向けて、学年の発達段階を踏まえ育成すべき能力を、学校の教育課程に位置付けて全教育活動を通して育成すべきものである。そのために、特別活動の学級活動では、集団活動の体験を通して他の人と折り合い、合意形成を図り、決まったことを遂行する能力を身に付けさせることがあげられる。このことは、キャリア教育の観点から考え、小学校高学年の発達段階において身に付けさせる必要がある資質能力でもある。

本研究で取り上げた事例は、キャリア教育推進の観点から考え、特別活動における学級活動の特性を生かした実践であると考えられる。

国文学科・教授